

氏名	佐野真弓
学位の専攻分野の名称	博士（言語コミュニケーション文化）
学位記番号	甲言第30号（文部科学省への報告番号甲第693号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2019年2月23日
学位論文題目	第二言語としての日本語の教室における学習者の相互行為能力：参加の組織化に注目した相互行為分析
論文審査委員	（主査）教授 森本郁代 （副査）教授 神崎高明 教授 大高博美 柳町智治（北星学園大学文学部教授）

論文内容の要旨

佐野真弓氏の学位申請論文は、「第二言語としての日本語の教室における学習者の相互行為能力—参加の組織化に注目した相互行為分析—」と題するものであり、第二言語としての日本語の授業で、学習者がやりとりに参加する際に彼らの相互行為能力がどのように立ち現れているのかを明らかにし、日本語教育に有益な実証的知見を与えることを目指している。

本論文は、全7章で構成されている。

「第1章 序論」

第1章では、第二言語習得研究における能力の捉え方について先行研究を概観した上で、本研究が相互行為的能力観に依拠することを述べるとともに、教室活動における学習者の相互行為能力を「参加の組織化」という観点から把握することの意義を主張している。

従来、学習者の能力は、正しい発話を産出する能力としての言語能力か、もしくは相手や場面に応じて適切な言語使用を行える能力としてのコミュニケーション能力のどちらかで捉えられてきた。それに対し、近年、他者との相互行為をどのように遂行しているのかという観点から言語に関わる能力を捉えようとする相互行為的能力観が提案されている。本研究の目的は、この相互行為的能力観に依拠して、教室でのやりとりで見られる学習者の相互行為能力を把握することであり、相互行為への参加の組織化という側面に焦点を当て、4つの研究設問を設定している。1つ目は、教室で学習者が自発的に次のターンを取得する時、それは相互行為的に適切に達成されているのか、達成されているのならば、それはどのようにして可能になっているのかという問いである。2つ目は、教師が一人の学習者を特定するような宛先語を用いずに発問した場合、教師の視線が学習者の一人に向けられていても、学習者全員に応答の機会を与えているのか、全員に機会を与えているのなら、この発問に対する応答の機会をめぐる学習者間の競合がどのようにして起こり、その競合が学習者らにどのように扱われているのかという問いである。3つ目は、教師の発問に対処すべく学習者間でなされる相互行為に注目し、それが教師を中心としたやり取りの中でどのように起こり、何をしているのかという問いである。そして4つ目の問いは、やり取りの中で学習者が自発的に情報提供を行う場合、それがどのような環境で起こっているのか、そして学習者はどのようなやり方で新しい情報を提供することを

達成しているのかというものである。

「第2章 分析のアプローチと教室研究」

第2章では、分析手法として用いる会話分析について説明し (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)¹、本研究に関連するこれまでの知見について紹介するとともに、会話分析を採用する意義について述べている。相互行為的能力観に依拠した研究の多くが会話分析を研究手法として採用しており、本章ではそのうち本研究に関連する代表的な先行研究を紹介している。さらに、教室談話研究についても、いくつかの教室研究の方法を概観した上で、会話分析的な研究として、本研究に大きな示唆を与えている Mehan (1979)² の研究と、Mehan が見出した IRE 連鎖について詳述し、5章と6章の分析の視座を示している。

「第3章 学習者の自発的なターン取得」

第3章では、本研究の第1の研究設問である、教室で学習者が自発的に次のターンを取得するとき、それは相互行為的に適切に達成されているのか、達成されているのならば、それはどのようにして可能になっているのかという問いを検討している。分析の結果、学習者の自発的なターン取得は、教師によって違反として扱われておらず、また、教師のターンが終わりうるタイミングで適切に行われていることを明らかにしている。さらに、ターン取得の際、ターンの冒頭で音調を上昇させたり語調を強めるなどのリソースを使用しており、他の学習者が同時にターンを開始する可能性に指向してターン取得を試みていることも見出している。

「第4章 宛先語を伴わない発問に対する学習者の応答」

第4章では、宛先が一人に特定されていない発問に対する学習者の応答に注目し、第2の研究設問である、教師の宛先語を伴わない発問は、その産出時に教師の視線が学習者の一人に向けられている場合にも、学習者全員に応答の機会を与えているのか、全員に与えているのなら、この発問に対する応答の機会をめぐる学習者間の競合がどのようにして起こり、その競合が学習者らにどのように扱われているのかという問いを検討している。

分析の結果、教師が特定の学習者に視線を向けつつ、宛先語を用いずに発問を行った場合、視線は次話者選択の方法としては機能しておらず、学習者全員に応答の機会が与えられていることを明らかにしている。また、結果的に複数の学習者の応答が競合する場合、後から開始した学習者のターンは、先行する学習者の発話が言い淀みなどで滞ったタイミングで開始されていることを見出している。こうした学習者のふるまいは、彼らが先行発話を注意深くモニターし、その発話の進行性の回復が期待される適切なタイミングを見計らってターンを開始していることを例証しており、彼らの相互行為能力の一端を示していると言える。また、先に開始した学習者も、自身の発話の途中で他の学習者が割り込んできたとき、自分のターンが生き残るよう、発話速度を早めたり音調を上昇させるなどの手段を用いていることを見出し、ターンの競合という相互行為上の問題に対し、学習者自身が適切に対処していることを明らかにしている。

「第5章 教師の発問に対処する学習者間の私的な相互行為」

第5章では、教室における参加の組織化のあり方について、第3の研究設問である、教師の発問に対処すべく学習者間でなされる相互行為、すなわち学習者間の私的な相互行為が、教師を中心としたやり取り (IRE 連鎖) のなかでどのように起こり、何をしているのかという問いを検討している。

IRE 連鎖とは、教師の発問 (Initiation)、学習者の応答 (Response) と、それに対する教師の評価 (Evaluation) から構成され、教室の相互行為を秩序立てる強力な手続きであることがこれまでの多くの研究で指摘されてきた。本章では、IRE 連鎖の観点からは一見逸脱的である学習者間の私的な相互行為の連鎖を分析し、彼ら

が私的な相互行為を展開する際であっても、IRE 連鎖という規範的な秩序を指向し、この秩序が維持されるようふるまいを調整することで、教室のメンバーとしての有能さを示していることを明らかにしている。

「第6章 学習者による自発的な情報提供」

第6章では、教室内で展開するやり取りの中で学習者が自発的に情報提供を行うという状況に注目し、第4の研究設問である、学習者の自発的な情報提供がどのような環境で起こり、学習者はどのようなやり方で新しい情報を提供しているのかを分析している。

Mehan (1979) は、学習者が自発的に開始した発言を「発言権の取得」、「話題の維持」、「新しい情報の導入」という3つの観点から論じ、これらを適切に行えることはその生徒の教室での有能さの評価につながると述べている。本章でも Mehan の主張に則り、この3つの観点から学習者の自発的な情報提供を記述し、学習者が、教師の発話が終わった、もしくは終わりをうるタイミングで情報提供を行う発話を開始していること、そしてその発話が先行文脈とかみ合った形で組み立てられていることを明らかにしている。このことは、学習者が、やりとりの展開において適切なタイミングを捉え、その都度利用可能なリソースを用いて適切な情報提供を行うという有能さを持っていることを示すものである。

「第7章 総合考察」

第7章では、第3章と第4章の結果を踏まえて教室のターン交替の観点から学習者の相互行為能力について論じるとともに、第5章と第6章の分析結果をもとに、IRE 連鎖が規範的な秩序として機能している教室活動において学習者の相互行為能力がどのように発揮されているのかを論じている。

まず、教室のターン交替の観点から見た学習者の相互行為能力に関しては、学習者が先行発話を注意深くモニターし適切なタイミングで自身のターンを開始していることを見出し、彼らが相互行為の秩序、すなわち、適切なターン交替を指向していることを明らかにした。適切なタイミングと手法でのターン取得は、相互行為への参加における学習者の有能さを示すものである。

IRE 連鎖の観点から見た学習者の相互行為能力に関しては、彼らがこの規範的秩序を維持しつつ、他の参加者との相互行為や自発的な情報提供を達成していることから、ここにも、適切に相互行為に参加する能力を見出すことができると主張している。

最後に、本研究は学習者のふるまいに焦点を当てており、教師のどのような発話やふるまいが学習者に参加の機会を与えるのか、あるいは、参加を促進したり阻んだりすることにつながっているのかについては未解明であるとし、今後の課題と展望として挙げている。

論文審査結果の要旨

佐野真弓氏の学位申請論文は、第二言語としての日本語の教室において発揮される学習者の相互行為能力の実態を、相互行為を達成するための「リソースとしての能力」と捉え、特に「参加の組織化」という観点から、会話分析の方法論を用いて詳細に検討している。

学習者の言語能力については、第1章で丁寧にレビューされているように、学習者個人の認知能力に帰属させる個体主義的能力観が今日まで主流である。それに対し、主に会話分析の立場から、言語能力を他者との相互行為の中で捉えることの重要性が指摘され、言語能力を「相互行為能力」を構成する能力と捉える見方が提出されている。しかし、この見方に沿った学習者の相互行為能力の記述と分析が蓄積され始めたのは近年のことであり、日本語学習者を対象としたものはまだほとんどないのが現状である。したがって、本論文は、日本語学習者の相互行為能力の記述に真正面から取り組んだ研究として評価できる。

本研究は、第二言語学習の教室談話研究としての側面もある。本論文で言及されているように、教室談話研究は1970年代から始まり、これまで数多くの知見が得られてきた。こうした研究の多くは、教室の持つ制度性、すなわち、教室における相互行為において、どのような規範的秩序が指向されているかの解明に関心を持っており、主に教師のふるまいが分析の対象となってきた。Flanders (1970)³を代表とする量的分析だけでなく、Sinclair & Coulthard (1975)⁴らによる談話分析、Mehan (1979)による構成的民族誌研究、そして会話分析でもあっても、教室の規範的秩序を指向する教師のふるまいに焦点を当てている点は共通している。それに対し、本研究は、学習者のふるまいに焦点を当て、イーミックな視点から「今、なぜ、それを」行うのかという会話分析の基本的問いに立って、教室内の相互行為における規範的秩序に迫っている点が従来の研究と大きく異なる点である。本研究は、第二言語学習者の相互行為能力の研究、教室談話研究、そして会話分析による相互行為の研究の3つの領域の知見を融合することで、教室における学習者の相互行為能力について、新しい知見を得ることに成功していると言えよう。

他方、いくつか課題も残されている。7章にも書かれているように、相互行為能力と第二言語能力との関係については、必ずしも明確になったとはいえない点もある。Carroll (2004)⁵が指摘するように、母語での能力が第二言語能力に転移されている可能性は、今回の分析結果でも示唆されているが、そもそも相互行為能力という概念と第二言語能力という概念を別々に立てることの意義については、さらに検討が必要であると思われる。

また、McHoul (1978)⁶は、学習者の自発的なターン取得は、教室でのターン交替の規則に対する「違反」と捉えているが、本研究では相互行為的に適切に達成されているとしている。ところが、なぜこうした違いが生まれるのかについては、十分に説明されていないように思われる。その違いは、「今どのような活動を行っているか」ということに対する学習者の理解に関わっている可能性がある。例えば、教師が文型の導入をしている時と、その文型を使って話をするを学習者に促すときとは、「今、何をすればよいか／できるか」に関する学習者の理解は異なる可能性がある。3章では学習者による自発的なターン取得が扱われているが、このふるまいが制裁を受けないのは、教授場面というよりも、そこから派生した副次的なやりとりであるからであるようにも見える。同様に、5章も、学生による自発的な情報提供が行われたのは、学習者自身の経験について尋ねたり、学習者が自分の経験や評価、国の事情を披露することが適切となるような場面である。第二言語としての日本語の教室では、疑似的な日常会話を持ち込むことによって、学習者に学習対象の文型の理解を促し、練習の機会を与えることが頻繁に行われる。そのため、教師による説明なのか、それとも疑似的な日常会話なのかなどといった、今、どのような活動をしているのかに対する学習者の理解についてさらに詳細な記述と分析が今後必要であると思われる。

また、7章の今後の課題にも述べられていたが、学習者のふるまいは教師のふるまいと切り離すことができないにもかかわらず、後者についてはまだ記述が不十分だと思われる箇所がある。例えば、3章では、学習者がどのようにターンを取得しようとしているのかに重点が置かれているが、直前の教師の発話が完了可能点に達している（もしくは達しようとする）ことを理解できている、ということも相互行為能力を考察する上で重要ではないかと思われる。

以上述べたように、本論文にはまだいくつか問題点が残されているが、これらの点は、本論文の博士学位申請論文としての価値を損なうほどの問題ではなく、むしろ今後の課題として位置づけられるべきである。本研究における相互行為の精緻な記述分析とそこから得られた知見は、日本語教育、第二言語習得研究、教室談話研究に大きく貢献するものであると評価できる。

以上、審査員4名は佐野真弓氏の論文を慎重に審査し、2019年1月18日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、佐野真弓氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。

【注】

- 1 Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735
- 2 Mehan, H. (1979). *Learning lessons: Social organization in the classroom*. Cambridge, MA. : Harvard University Press.
- 3 Flanders, N. (1970). *Analyzing teaching behavior*. Reading, MA.: Addison-Wesley Pub. Co.
- 4 Sinclair, J. M., & Coulthard, M. (1975). *Towards an analysis of discourse: The English used by teachers and pupils*. London: Oxford University Press.
- 5 Carroll, D. (2004). Restarts in novice turn beginnings: Disfluencies or interactional achievements. In R. Gardner, & J. Wagner (Eds.), *Second language conversations*, pp.201-220. London · NewYork: Continuum.
- 6 McHoul, A. (1978). The organization of turns at formal talk in the classroom. *Language in Society*, 7, 183-213.